

「タイ・チュラロンコン大学サマースクール参加報告書」

京都大学文学部2年 渡辺幸奈

まず始めに今回の活動内容を簡単に紹介する。大学での活動は、大学の授業は1コマ3時間で、1週目と2週目の火曜日までは午前と午後に1コマずつ、最後の3日は午前1コマ受講するというような形だった。授業内容としては、大半は京大の日本人学生のみで英語でタイ語を学習する授業で、残りは、タイの歴史や文化を学習したり、エメラルド寺院で実地研修を行ったり、アジアンティークでムエタイ(タイのボクシング)ショーを見たり、マーライ(寺院にお供えする花輪)を作ったり、最後にはチュラロンコン大学日本語学科の学生と一緒にポスターを用い、相互の国の文化の良いところをテーマ別に調べて発表した。放課後は、タイの学生と一緒にバンコク市内の観光地をめぐるたり、大学の近くで食事したりした。休日は、土曜日は実地研修でアユタヤでタイの歴史に触れ、日曜日は自由行動で私はタイの学生にバンコク市外の鉄道マーケットと水上マーケットに連れていってもらった。

思っていたよりも発表に割いた時間は少なかったが、その分バンコク市内のあらゆるところに行くことができ、タイ語を用いて、市場で買い物したり、値切ったり、料理を注文したり、地元の人々と挨拶を交わしたり、習ったタイ語を実践する機会が多く、よりタイという国に馴染めた気がする。また、これらのことを通じて、街で働く人々の、いわゆる「営業スマイル」ではない心の底から溢れ出る笑顔や人々の温かさに触れ、「微笑みの国タイ」が決して偽りではないことを身を持って実感した。

もちろんタイの学生から刺激を受けることも多かった。主に日本語学科の学生としか関わっていないが、多くの学生が高校1年の頃から日本語を学び始め、入試科目に日本語があったとはいえ、日本語の能力が想像以上に高く、日常会話には全く不自由しないどころか、方言や今流行りの若者言葉まで知っている学生もいた。また、日本の大学生が苦手と言われている、英会話能力も高く、語学へのモチベーションや勉強方法を省みる良い契機になった。さらに、マンガやアニメ、Jポップを始め、多くの日本のポップカルチャーが浸透しており、興味の有無に関わらず、学生との会話を盛り上げるためだけでなく、教養として学んでおくべきだなと思った。

私は、海外に行くのは今回のプログラムで2回目、私の家族は誰も日本を出たことがなく、海外渡航というものは私にとってあまり身近なものではなかった。しかし、日本を出て外から自国を客観視したり、国外での生活を体験することで、知見を広げられたり、人間的に成長できたりすることがある。私も今回のプログラムで大きく成長できたと思うので、このような経験を何度もしたいと思うし、海外に行こうか悩んでいる人々に海外に行くこと、特にタイに行くことを強く薦めたいと思う。

最後に、今回のプログラムに携わっていただいた先生方や、一緒にプログラムに参加したみんなに感謝の気持ちを伝えたい。